

北原白秋における象徴意識

——とくに『邪宗門』系列の場合——

石 丸 久

北原白秋（明治十八年～昭和十七年、一八八五年～一九四二年）の第一詩集『邪宗門』は、初版（明治四十二年三月、易風社発行）、再版（明治四十四年十一月、東雲堂書店発行）、第三版（大正五年七月、東雲堂書店発行）と重ね、更に昭和二十三年十二月、服部嘉香校訂本が西郊書房から白秋全集の後記（昭和五年九月）の鈔録を付して出版されている。

この詩集の巻頭に、詩人は「邪宗門扉銘」なるものを掲げているが、とくに蒲原有明に献じた再版のみで、三行目の「魔睡」が「麻酔」とされている。――

邪宗門扉銘

ここ過ぎて曲^{まが}節の悩みのむれに、
ここ過ぎて官能の愉^{たの}楽のそのに、
ここ過ぎて神経のにがき魔睡に。

おそろく、これはダンテ・アリギエリ（Dante Alighieri, 1265

～1321）の、例の『神曲』（La Divina Commedia, 1314～21）の「地獄篇 第三歌」（Inferno—Canto III）というよりも、その訳詩から、レトリックの上の影響を受けているものではなからうか。

森鷗外が、アンデルセン（Hans Christian Andersen, 1805～1875）原作の『即興詩人』（1835）をドイツ語からの重訳 Die Improvisatoren で明治二十五年から同三十四年にかけて、『しらみ草紙』から『めざまし草』へと訳載し、後に単行出版したのが同三十五年九月であった。その中の「神曲、吾友なる貴公子」なる一章に、――

「地獄の関に刻めりといふ銘は、全篇を読む間、我耳に響くこと、世の末の裁判の時、鳴りわたるらん鐘の音の如くなりき。その銘に云く。

ここ過ぎて うれへの市に
ここ過ぎて 歎の淵に
ここ過ぎて 浮ぶ時なき

群に社 人は入るらめ

とある。

ダンテはまた、上田敏にとっても早くからの関心事で、その人やその作について諸誌にものした文が見られるが、『詩聖ダンテ』として一応のまとまりを金港堂から単行出版したのは明治三十四年十二月であった。その中の「八 略解 地獄界 三歌」の一節には、――

われ過ぎて、歎のまぢに、われ過ぎて、とはの悩に、われ過ぎてほろびの民に

と訳を付して、原文を次のように引いているのである――

Per me si va nella città dolente,

Per me si va nell' eterno dolore,

Per me si va tra la perduta gente.

白秋は、鵜外訳か敏訳かにより、言葉の内容よりも、修辭に拠って、かの「扉銘」を刻したのであったらう。「曲節の悩みのむれ」といい、「官能の愉楽のその」といい、「神經のにがき魔睡（麻酔）」という。まこと、この詩集一卷の特色はことあげしえて妙である。

なお、上田敏の没後公けにされた『ダンテ神曲 未定稿』（大正七年七月）によれば、ここの訳は次のようになってゐる――

こゝ過ぎてかなしみの都へ、こゝ過ぎてとはのなやみに、こゝ過ぎて、ほろびの民へ人はゆく、

また、彼が参観したと思われる ロングフェロウ (H. W. Longfellow, 1807~82) の英訳は、

Through me the way is the city dolent;

Through me the way is to eternal dole,

Through me the way among the people lost

とあり、かつ、これに注してこう述べてゐるのである――

This canto begins with the repetition of sounds like

the tolling of a funeral bell: dolente……dolente!

この歌は、ドレント……ドローレと、まるでお葬いの鐘の響きのような音のくりかえしでもって始まつてゐる

前にも言ったように、この歌の中味が白秋のいう象徴に直ちにかかわるものではないけれども、この妙なる調べの対句的なレトリックが、そして、あえていうならば宗教―邪宗の雰囲気、白秋の心にひそみ入り、かの「扉銘」を作らせることとなつたのもあろうか。

いうまでもないことだが、しかしながら、白秋のパロディーは、決して敬虔な信仰や真剣な地獄への凝視にかかわるものではなく、むしろ、彼の絢爛たる詞宴の謳いあげにすぎなかつた。世にいう彼の詩業の無思想性でもあろうが、ともかくも、彼としては象徴の宣言のつもりであつたらう。TONKAJONのおあそびといふのは酷であらう。

今から三十年余りも前のことにならうか、私が旧制の大学院に学んでゐた頃だつたと思うが、研究上のことでいろいろとうかが

いたい節があり、河井醉茗先生をこ自宅にお訪ねしたことがある。その時、持参した『明星』の最初の五冊（明治三十三年四月——同年八月）を感慨深げにこらんになり、やおら筆を執られて、第一号の包み紙に、「明星の光はここに残り 醉茗生 七十七歳」とご揮毫くださった。それからいろいろの貴重なお話を承ったり、名家の珍らしい寸楮尺牘の類を見せてくださったりしたが、その中に、白秋の『邪宗門』口絵の原画が葉書に描かれているのやら、「いよいよ薄愁を白秋とあらため候」という文面の葉書があったことを想い出す。このことは余り伝えられていないようであるから、あえて、ここに記しておくこととする。

白秋は、その第一詩集『邪宗門』の序に次のように叙している

詩の生命は暗示にして単なる事象の説明には非ず。かの筆にも言語にも言ひ尽し難き情趣の限なき振動のうちに幽かなる心靈の歎歎をたづね、縹渺たる音楽の愉楽に憧がれて自己観想の悲哀に誇る、これわが象徴の本旨に非ずや。さらば我らは神秘を尚び、夢幻を歛び、そが腐爛したる頽唐の紅を慕ふ。哀れ、我ら近代邪宗門の徒が夢寝にも忘れ難きは青白き月光のもとに歎歎く大理石の嗟嘆也。暗紅にうち濁りたる埃及の濃霧に苦しめるスフィンクスの瞳也。あるはまた落日のなかに笑へるロマンチッシュの音楽と幼児薩殺の前後に起る心状の悲しき叫也。かの黄臘の腐れたる絶間なき座標と、井オロンの三の絃を擦る嗅覚と、曇硝子にうち噎ぶウキスキイの鋭き神経と、人間の脳髓の色したる毒艸の匂深きためいきと、

官能の魔睡の中に疲れ歌ふ鶯の哀愁もさることながら、仄かなる角笛の音に逃れ入る緋の天鵝絨の手触の棄て難さよ。

これにつづく「例言」としては、左の七箇条を挙げてゐる——
一、本集に収めたる六章約百二十篇の詩は明治三十九年の四月より同四十一年の臘月に至る、即最近三年間の所作にして、集中の大半は殆昨一年の努力に成る。就中『古酒』中の「よひやみ」「柑子」「晩秋」の類最も旧くして『魔睡』中に載せたる「室内庭園」「曇日」の二篇はその最も新しきものなり。

一、予が真に詩を知り初めたるは僅に此の二三年の事に属す。されば此の間の前後に作られたる種々の傾向の詩は皆予が初期の試作たるを免れず。従て本集の編集に際しては特に自信ある代表作物のみを精査し、少年時の長篇五六及その後の新旧作七十篇の余は遺憾なく割愛したり。この外百篇に近き「断章」と「思出」五十篇の著作あれども、紙数の制限上、これらは他の新しき機会を待ちて出版するの已むなきに到れり。

一、予が象徴詩は情緒の諸楽と感覚の印象とを主とす。故に、凡て予が抛る所は僅かなれども生れて享け得たる自己の感覚と、刺戟苦き神経の悦楽とにして、かの初めより情感の妙なる震慄を無みし只冷かなる思想の概念を求めて強いて詩を作為するが如きを嫌忌す。されば予が詩を読まむとする人にして、之に理知の闡明を尋ね、幻想なき思想の骨格を求めむとするは謬れり。要するに予が最近の傾向はかの内部生活

の幽かなる振動のリズムを感じその儘の調律に奏でいでんとする音楽的象徴を專とするが故に、それが表白の方法に於ても概ねかの新しき自由詩の形式を用ゐたり。

一、或人の如きは此の如き詩を嗤ひて甚しき誇張と云ひ、架空なる空想を歌ふものと做せども、予が幻覺には自ら真に感じたる官能の根柢あり。且、人の天分にはそれそれ自らなる相違あり、強ひて自己の感覺を尺度として他を律するは謬なるべし。

一、本来、詩は論ふべききはのものにはあらず。嘗て幾多の譏笑と非議と謂れなき誤解とを蒙りたるにも拘らず、予の單に創作にのみ執して、一語もこれに答ふる所なかりしは、些か自己の所信に安じたればなり。

一、終に、現時の予は文芸上の如何なる結社にも与らず、又、如何なる党派の力をも恃む所なき事を明にす。要は只これらの羈絆と掣肘とを放れて、予は予が独自の個性の印象に奔放なる可く、自由ならんことを欲するものなり。

一、尚、本集を世に公にする事を得たる所以のものは、これ一に蒲原有明、鈴木鼓村兩氏の深厚なる同情に依る、ここに謹謝す。

明治四十二年一月

著者識

この詩集は、各章のはじめに、いろいろと序詞を冠しているが、そのうち、詩人自身によるものを抄出すると——（再版・三版も同文）——

『朱の伴奏』

凡て情緒也。静かなる精舎の庭にはのめきいでて紅の戦慄に盲ひたる井奥ロンの響はわが内心の旋律にして、赤き絶叫のなかにほのかに啼けるこほろぎの音はこれ亦わが情緒の一絃によりて密かに奏でらるる愁也。なげかひ也。その他おほむね之に倣ふ。

『古酒』

こは邪宗門の古酒なり。近代白耳義の所謂フアンドシエクルの神經には柑桂酒の酸味に堅笛の音色を思ひ浮かべ梅酒に喇叭を嗅ぎ、甘くして辛き茴香酒にフルウトの鋭さをたづね、あるはまたウキスキイをトロムボオンに、キユムメル、ブランドイを嚙咬として鼻音を交へたるオボイの響に配して、それそれ句強き味覚の合奏に耽溺すと云へど、こはさる驕りたる類にもあらず。微くさき穴倉の隅、曇りたる色硝子の窓より洩れきたる外光の不可思議におぼめきながら煤びたるフラスコのひとつに湛ゆるは火酒か、阿刺吉か、又はかの紅毛の珍醖の酒か、えもわかねど、われはただ和蘭わたりのびいどろの深き古色をゆかしみて、かのわかき日のはじめに秘め置きにたる様々の夢と句とに執するのみ。

とくに蒲原有明にデディケイトされた『邪宗門』の再版（明治四十四年十一月二十五日、東雲堂書店発行）には、巻頭に「再版例言」六箇条を掲げている。その中、詩人自らが語るその詩風にかかわるところを抄出すると、およそ次のような文言が読みとら

れる——

一、曩にも云へる如く「邪宗門」と「思ひ出」とは両々相俟ちて初めてわが第一期の詩風を完全に代表するものにして、前者を劇しき外光派の絵画と見る時は後者はそのかげに頼へるテレビン油の微かなる潤りにも譬ふべきか。またこれらの音楽には狂ほしき近代の交響体を模せたとくども、彼には仄かなる薄明のハアモニカ、たゞしは葱の畑にかくれて吹く銀笛のなげきにも似て少年のころ覚束なくもうち顫へり。……〔以下略〕

一、わが当時の詩風に就ては今さら多く語るを欲せず。されど一言すればただ初めは印象風の絵画的描写より奔放限りなき音楽的象徴に出で、最後に捉へがたき内心の秘奥を探り、澄むよしもなき気分（気分）の麻酔に身をうちひたさんと欲するに至れり。その趣は時に従ひて様々なれども、何れも自らの官能に根柢（こんだ）を求めて、架空なる空想とかの冷かなる觀念風の作為とを極端に退けたるは皆同じ。凡てわが拠る所は僅かなれども生れて享け得たる自己天稟の感覚と刺戟苦き神経の悦楽とにして、わが詩と生活とは常に同じ水脈の上に躍る陽光と飛魚との如くに入り乱れて、また常に痛ましき歎歎の影を投げたり。

さらに、この詩集の第三版（大正五年七月一日、東雲堂書店）は、『魔睡』のタイトルページの裏に、再版の『麻酔』タイトルページの裏面と同じ文章が、次のように付けられている——これ

は初版にあった長田秀雄の文に代るものであるが——（なお、初版でもマスイが「魔睡」となっていた）——

毒草のかげを走り疲れし稿書き蜥蜴の悲みを知る人ありや。わがこころはある日紅く曇りし濁江の空にそことなく下りゆく風船のけはひに驚かされ、児供の河岸に泣かす人形の声に刺されて、何ならぬ気分（気分）の悩ましきをも味ひぬ。かの強き油絵具に倦み、狂ほしき管絃楽にかきみだされしあとに、何時しかわが求めしは捉へがたきある匂ひのムードなりき。か的气氛（気分）の、わきがたき陰影のなやみなりき。あはれ、楽しき一夜を躍り疲れし Dacca の襟おしろいの汗のゆかしさ。

『邪宗門』の初版（明治四十二年三月、易風社発行）、再版（明治四十四年十一月、東雲堂書店発行）、および第三版（大正五年七月、東雲堂書店発行）に亘つて、南蛮趣味を物語る「邪宗門秘曲」が冒頭に奏でられている。これは、かなり広く——そして必ずしも深くなく識られているものであるが、後に紹介する作品に先行するものであるから、一応ここに掲げておくことにしよう——

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。

黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を、

色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいの、

南蛮の棧留稿を、はた、阿刺吉、珍配（ちんぱい）の酒を。

目見青きドミニカ（ドミニカ）びとは陀羅尼誦し夢にも語る、

禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖藥、芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、波羅羣僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火点るといふ。かの美しき越歴機の夢は天鵝絨の蓆にまじり、珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしほり、腐れたる石の油に画くてふ麻利耶の像よ、はた羅甸、波爾杜瓦爾らの横つづり青なる仮名は美しくしき、さいへ悲しき飲楽の音にかも満つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、百年を利那に縮め、血の礎背にし死すとも惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢、善主磨、今日を祈に身も霊も薫りこがるる。

四十一年八月

この『邪宗門』を初版から三版まで出して後、白秋は、大正六年十二月一日雑誌『詩篇』を創刊しはじめた。この新刊雑誌の大正七年の新年号（発禁本）から二月号にかけて、「新邪宗門秘曲」

微論の一節が据えられた――

新邪宗門秘曲

おお、外道婆羅門の暁が来た、紅い不可思議国の夜明だ。わしはいま万法の理を超えて、茲に新邪宗の大自力を示す。

莊嚴せられた邪惡、

もろもろの美と驕奢とを崇めよ。

あらゆる醜の中に耀やき、

あらゆる幻想と罪過の闇に沈め。

わしは思ふ、三眼の破壊神湿婆の妖術、印度恒河の奔流はその額より迸はしる。

わしは思ふ、梵。これこそは法界の髓、

わしは思ふ、真の真、幻の幻、吠哆の讃唱と禁呪。

わしはこれ、鼻の黒と赤との心臓、

麝香猫の麝香の腋臭、

酔ひ痴れた緑蠍龜の血染めの胃の腑、

燃えあがる虎の足爪、蝸牛の触覚の角、

おおさうして靈牛の仏性と智慧の瞳。

わしは鴆毒、而かして大牢の滋味、

わしが言葉は縷々として糸の如く、煙のごとく、

日夜 夜見城の蜘蛛の糸巻の中に坐り、

近づくあらゆる凡てに怪しき芬香をそそぎかくる。

わしは見透す、立体のうしろの面を、

円球の心、角錐の尖、あらゆる物質の重さと力、

わしが魔法は而も空間に我を放つ。

わしは裸身の善天魔、又悪天魔、

永久の嬰兒、

天界と地獄のかけはし、

嵐、雲、電光、澄みわたる蒼穹の微笑。

わしは又雨、しんしんとふりつもる雪、

わしは又太陽、えんねんたる宇宙の火、

幽霊の眞の正体、

燐と硫黄の発光体。

わしは知る、神より魔へ墮つる一刹那と、

魔より又神へ飛ぶ一刹那を。

その大歓喜、大悲哀、

縹々恍惚たる霊と肉との管絃楽。

おお、わしが信徒よ、わしと共に祈れよ、
真に浄罪の証は身を以て身を滅ぼす事だ。

おお、腐れ、泣け、もがけ、踊れ、苦しめ、狂へ奔れ、叫べよ。
おお、さうして愛せざる可からずして愛せ、

真に涙をこぼして地獄の沼より伸びあがれよ。

またの世は神か、悪魔か、

人間のわしが云ふ言葉はこれかぎりだ。

おゝ、わが信徒よ、わしと共に祈れよ。

注〔裏表紙粘付の「誤植訂正」にもとづき正誤。〕

〔右の詩の最終行には、紙が粘つてあり、透かして見なければ見えないようになってゐる。〕

『詩篇』の新年号（第二編第一輯、千九百十八年一月一日—

大正七年一月一日、巡礼詩社発行）には、また、「新邪宗門宣言」、
次号には「新邪宗門宣言（二）」が載っている。新年号は発禁本で、

「高踏超越の旗幟を鮮明したる点に於て、実に現詩壇の驚異たる
わが『詩篇』は、偶々一編輯者の不明より新年号其筋の忌違に触

れて全部差押へられ、秩序紊乱の嫌を以て発売禁止の敕命に接し
……」と次号（二月号）の社告「前号の発売禁止に就て」にある

ので、今、ここに敢てこの「宣言」なるものを掲げておく——

新邪宗門宣言

詩は詩である。人間の肉体及び靈魂全部を以てする眞の眞覚
である。六官七情のあらゆる、凡ての眞実に根ざすところの

一大管絃案、而してそれら凡てを統一するところの真の意力、睿智、斯くして真の奇蹟が吾等の空間に初めて真の詩として顕現される。私が再び永い沈黙を破って、玆に改めて新邪宗門の宣言をなす所以は、彼現在詩壇に跳梁する觀念のみの人道主義、根柢なき偽神秘主義、若くは人為的象徵主義その他あらゆる拙劣なる散文律の詩派に対する挑戦である。ほんとの詩はこれから生れるのだ。

愈新邪宗門宣伝の暁が来た。日本のあらゆる詩派を統一する真の使命が果して誰の頭上に下ったか、今日以後を見るがいい。(千九百十八年一月一日の暁光を記念する為め、北原白秋識す。)

新邪宗門宣言(二)

北原白秋

『われは思ふ末世の邪宗切支丹でうすの魔法。黒船の加比丹を、紅毛の不可思議国を』と歌ひ、更に『百年を刹那に縮め、血の磔背にし死すとも惜しからじ、願ふは極秘、かの奇しき紅の夢。』と祈り、肉をあげて官感と神経の糜爛と陶酔とに深く耽溺した彼の『邪宗門』の管絃案を私は再び呼び戻す。而も玆に靈の意力と睿智とを以て統一し透覚し、更に純愛と真実とを以て、真に人間の血たり鹹たり光たらむとする。これが新邪宗門の詩である。吾徒の詩は水ではない、無論パンでもない。魔酒であり、火焰であり、砒石であり、鳩毒である。而もその中に真の靈智は地獄の花の如く、淫蛇の

精、夜陰の星、更に肥え太りたる妖婦の小さき頸玉の如く光る。玆に、縦まに現世詩壇の本流と称する者に對し、新邪宗門の朱色の大旗を翻すと雖、畢竟するに吾徒の行ふ道こそ真の詩の正風である。真の人間の、真の現代の詩篇である。吾徒は神の名によりて猥りに天の宝位を潜するもの、若くは詩を宗教哲理の方便視する詩の自辱者、凡庸懦弱なる散文者流に對し、真の人間の詩、真の天才芸術の權威を宣言し、顯揚する。今後を見よ。

なお、『詩篇』の第二編第一輯は、本文の最終(ペイジ)七十三(イシ)に、次の叙述を記載している――

対象を觀照して、これを喚起した幻想裡に感情の飛揚する時『詩』は生れる。

さきの高踏派の詩人は対象の凡てを把えて示したから、興趣を缺き、き人をして自から創作する享樂を奪つた。対象を明らかに現はすのに詩興の四分の三を失つた。詩の妙味はだんだんに迫る感情のリズムの内にあるのだ。暗示は幻想だ。この運用を象徴と云ふのだ。或る心的状態を表現する為に自づから対象を喚び起し、又その反對に対象を觀照した後、これから一の心的状態を遊離せしめるのだ。

(ステファンヌ、マラルメ)

〔この文も例の「誤植訂正」によつて正誤したが、パンクチュエーションなどの位置につき、なお疑念あり。(ママ)としてこれを記載する。〕

この文を一瞥する人は、誰でも、曾つて、上田敏が『明星』（巳年第六号＝明治三十八年六月号）に掲げ、後、訳詩集『海潮音』（明治三十八年十月、本郷書院発行）二三八―二九九ページに収めた例のマラルメの象徴説を思い出すであらう。右の文は、その和文和訳——しかもやや不完全なる——にすぎない。人によって、あるいは、遑つてジュール・ユレの伝えたマラルメの談話を原語で想い起こすかも知れぬ。

まず、上田敏の和らげた文を示すと――

物象を静観して、これが喚起したる幻想の裡、自から心象の飛揚する時は「歌」成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙を虧く、人をして宛然自から創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を没却するものなり。読詩の妙は漸々遅々たる推度の裡に存す。暗示は即ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徴と名づく。一の心状を示さむが為、徐に物象を喚起し、或は之と逆まに、一の物象を採りて、闇明数番の後、これより一の心状を脱離せしむる事これなり。

〔テファンヌ・マラルメ〕

この原典について、上田敏は何も断っていないけれども、もと、ジャーナリストのジュール・ユレ（Jules Huret, 1864～1915）なる者が、一八九一年、著名な文人六十四人にインタヴューをして得たアンケートへの応答を編んだ *Réponses à des Enquêtes sur l'Évolution littéraire* 「文学の発達についてのアンケートへの応

答集」というものから、マラルメの語の一部を抜いたものである。

この『応問録』は、一八九一年の七月三日から五日まで、*L'Écho de Paris* 「パリの反響」紙に載ったが、同年、シャルバンティエ社から単行出版を見たが、マラルメに関する部分は、その五十五ページから六十五ページにわたっている。

そのうち、上田敏が右のように訳述した部分を、念のため、原文で引用すると――

Nommer un objet, c'est supprimer les trois quarts de la jouissance du poème qui est faite de deviner peu à peu: le suggérer, voilà le rêve. C'est le parfait usage de ce mystère qui constitue le symbole: évoquer petit à petit un objet pour montrer un état d'âme, ou, inversement, choisir un objet et en dégager un état d'âme, par une série de déchiffrements.

さらに「曖昧」(*L'obscurité*)という点に関して、次のように言つたマラルメの語には、吾が国の象徴文学の理解の面からも作法の点からも、かなりの影響を及ぼしたと思われるから、そう軽々に看過できぬ節があろう――『応問録』中、右の文に後続する詩匠のもの言である――

Il doit y avoir toujours énigme en poésie, et c'est le but de la littérature,——Il n'y en a pas à d'autres——
d'évoquer les objets.

詩にはいつも謎の言葉がなくてはならぬ、それこそが文学の狙いにはかならぬのだ——そのほかのことはなくともいい——それらの物象を喚び起すには。

白秋の『邪宗門』に発する詩業の流れの底に隠見する象徴意識とその気負いは、かく、上田敏によって紹介せられた泰西詩論に負うところ少なからざるものがあろうけれども、その敬慕して已まなかった稀有の象徴詩家蒲原有明からの影響もまた浅からざるものがあつた。

要するに『邪宗門』の詩人が宗と仰ぐものは、*De la musique avant toute chose*「何ものよりも音楽を」と歌うヴェルレヌであり、*le suggérer, voilà le rêve*「おぼめかすことにこそ夢はあれ」といふ、*Il doit y avoir toujours énigme en poésie*「詩にはいつもエニグムがなくてはならぬ」というマラルメであ

新刊紹介

原 子朗著

『筆蹟の美学』

ユニークな本である。文は人なり、という言葉と並べて、著者は「筆蹟こそもつとも人である」といい、筆蹟のもつ造型的な伝達性は書き手の表情を認め、そ

り、芸術と靈魂との *déliquescence* (溶融) にデカダンスの人工美を追い求める *A Rebours*『おかしさに』のユイスマンス等々であつて、*Le Printemps admissible a perdu son odeur*「愛すべき春は、その香を失ひぬ」と絶望し、*Je suis la plaie et le couteau*「吾は傷、そして刃」と苦悩する *Les Fleurs du Mal*『悪の華』の詩人ボオドレエルの *L'Héautontimoroumenos*「レオントンティモルメノス」(自虐)ではなかった。白秋の自筆の伝記には、「与謝野寛を通じて森鷗外、上田敏、蒲原有明の知遇を享け……」(『現代詩人全集』第五巻、新潮社)と書いてある。

その有明が、夙に翻然と悟るところがあり、「わたくしはマラルメとヴェルレヌとを去つて、よろしくその源泉たるボオドレエルに就くべきであらうと考えたことは一再でない」と、『飛雲抄』に述懐しているのに……。

これからトータルとしての人間像をとらえようと試みる。

まず著者は、書くことの歴史を古代からたどり、素材とともに筆記具の変遷にも周到な目配りで通覧している。

本書の本領は、明治以来の近代現代の著名な思想家、文学者のさまざまな筆蹟(作品原稿・色紙・書翰等々)を通して、それら筆者の真髓に迫ろうとする、著者

の果敢な筆鋒にある。視点を変えた近代文学史の側面をも有し、著者の説くところに共感あるいは別様の感を抱くにしても、楽しくまた興味深い叙述は、多く著者の文章に負うであらう。

いま一度、おのれの筆蹟にも思いをいたす機会が与えられる一冊といえる。

(昭57・10 東京書籍 B6判 二七四頁 一二〇〇円)〔山崎正之〕